慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドゥルーズ『差異と反復』における「個体化」論の構造：カントの超越論哲学との対比を中心に
Sub Title	Sur la structure de >, >. La différentiation, qui prend pour modèle des théories mathématiques, constitue ce que nous appelons où les termes se rapportent réciproquement par un rapport différentiel sans présupposer leur identité préalable. Cette théorie de relation nous rend possible de décrire la genèse interne des termes actuels, c'est-à-dire l'actualisation ou la différenciation, et en même temps, de déterminer la nature de l'intensité (ou de la grandeur intensive). En fin de compte, c'est cette nature de l'intensité qui permet l'emboîtement de la différentiation et de la différenciation. Et l'individuation, c'est le processus original de l'intensité. C'est cette série d'argumentations qui constitue la philosophie transcendantale de Deleuze lui-même dans Différence et répétition.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000139-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドゥルーズ『差異と反復』における「個体化」論の構造

――カントの超越論哲学との対比を中心に――

秋　保　　亘*

Sur la structure de « l'individuation » dans *Différence et répétition* de Deleuze

—Autour d'une polémique contre la philosophie transcendantale de Kant—

Wataru Akiho

La théorie d'individuation, occupant la position centrale dans le système de *Différence et répétition*, réunit en bloc une série de conceptes ou de sujets théorétiques dont chacun est important pour ce système: « différence », « intensité », « synthèse du temps et de l'espace », « l'empirisme transcendentale », etc. Si bien que cette théorie est présente partout dans cette œuvre, mais de façon fragmentaire, et qu'il n'est pas facile par conséquent de la saisir dans sa totalité. Le présent article prend pour but de discerner la notion totale et complexe d'« indi-différen*t*/*c*iation », et par là nous tenterons de préciser l'enchaînement qui relie l'individuation, la différen*t*iation et la différen*c*iation, ou l'actualisation. De plus, en prenant en considération l'opposition polémique de Deleuze contre la philosophie transcendantale de Kant, nous essayerons d'apprécier la portée philosophique de la théorie de « l'individuation ».

La différen*t*iation, qui prend pour modèle des théories mathéma-

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師

tiques, constitue ce que nous appelons « théorie générale de relation » où les termes se rapportent réciproquement par un rapport différentiel sans présupposer leur identité préalable. Cette théorie de relation nous rend possible de décrire la genèse interne des termes actuels, c'est-à-dire l'actualisation ou la différen*c*iation, et en même temps, de déterminer la nature de l'intensité (ou de la grandeur intensive). En fin de compte, c'est cette nature de l'intensité qui permet l'emboîtement de la différen*t*iation et de la différen*c*iation. Et l'individuation, c'est le processus original de l'intensité. C'est cette série d'argumentations qui constitue la philosophie transcendantale de Deleuze lui-même dans *Différence et répétition*.

はじめに

本稿は『差異と反復』(以下 DR)[1] における個体化の理論を主題とする[2]．個体化の理論は，差異，強度（量），反復，時間の総合，空間の総合，能力論，システム論，問題論，存在の一義性，超越論的経験論，潜在性，理念，永遠回帰といった DR の重要な主題群が交差する場面であり，それゆえ DR の全体的な構造，ならびに DR におけるドゥルーズ哲学の体系内の概念布置を明らかにするためには避けて通ることのできない論点である．ところがこの同じ理由により，個体化論の十分な理解のためには，これらの多岐にわたる複数の主題それぞれにかんする立ち入った個別研究も必要となろう．本稿では今後の包括的な研究の足固めとして，個体化の「総体的な基礎概念」として提示される「個体化–差異化＝微分化／分化（個体化–ドラマ化–差異化＝微分化／分化）[indi-différen$^{t}_{c}$iation (indi-drama-différen$^{t}_{c}$iation)]」(317) に焦点を合わせ，DR のいたるところに記述が分散し[3]，それゆえ容易にはその全体像を見通しがたい個体化，ドラマ化，差異化＝微分化，分化＝現実化の連関と，これらそれぞれの内実を可能なかぎり明確化することを目的とする．けれどもそのためには，ドゥルーズの議論をたんに整理するだけでは不十分であり，私たちの分析を導くひとつの補助的な問いを立てることによって，問題の所在を浮かび上がらせつ

つ検討を進めていく必要がある．この補助的な問いとは，DRの個体化の理論がいったいどのような哲学的問題に応じるものとして提示されているのか，という問いである．あらかじめ見通しを示しておけば，個体化の理論を検討するさいにつねに念頭に置いておく必要があるのは，カントの超越論哲学との対比であり，ドゥルーズの個体化の理論が，DRにおける彼自身の超越論哲学の核心を示す理論に他ならないという点である．ドゥルーズが彼のスピノザ論で語っている印象的な一文を引き写していうなら，DRの個体化の理論は，そこにカントの超越論哲学とのたえざる闘いをみてとるのでなければ部分的に理解不可能にとどまるのである[4]．

問題の所在

まずは，ドゥルーズが標的とするカント的な超越論性，そしてまたその不十分な点としてドゥルーズが指摘する論点を，私たちの議論に必要なかぎり手短にまとめることで，問題の所在を明らかにすることから議論を始めよう．

ドゥルーズによるカントの「超越論的」という措辞の定義は，「「超越論的」とは，私たちのアプリオリな諸表象への経験の所与の必然的従属の原理を，またこれと相即的に，アプリオリな諸表象の経験への必然的適用の原理を特徴づける」というものである[5]．それゆえドゥルーズの関心はさしあたり，「各々の対象が，ひとつの可能的経験における直観の多様なものの綜合的統一の必然的な諸条件にしたがう」という「あらゆる綜合判断の最高原理［原則］」［*KrV*, A158＝B197］めぐる問題に向けられるといってよい[6]．この最高原則は，「私たちがかかわっている多様が，統覚の統一の支配へと適合することしかありえない」ということと，「客観性」が「私たちの知にふさわしい仕方で裁断されている」ということ，この二つを保証するという点で，第一批判の「まさしく中心的なテーゼ」であろう[7]．しかしドゥルーズの診断によればカントは，「超越論的といわれる

構造を，心理学的な意識の経験的諸活動の上に転写している」(177)．その具体的な例としてドゥルーズが提示するのは，『純粋理性批判』第一版のいわゆる三段の綜合（把捉の綜合，再生の綜合，再認の綜合）[8] である［*KrV*, A97–110］．ここでカントは，カテゴリーの客観的妥当性の証明，すなわち演繹，いいかえれば，「経験の可能性のためのアプリオリな基礎をなす主観的諸源泉を，それらの経験的な性質にしたがってではなく，それらの超越論的な性質にしたがって」考究することを自らに課している［*KrV*, A97］．しかしながらドゥルーズによれば，ここでカントはたとえば「把捉の超越論的綜合」を「直接に経験的把捉から帰納している」(176–177)．ドゥルーズは『純粋理性批判』第二版でも，その「心理学主義」とともに「転写の方法」は残ると診断するが（177），こうした転写の問題点として，まず経験の可能性の条件となるべき超越論的なものが，当の経験の側から帰納されるという「悪循環」が存する（351）．加えて鈴木によれば，「いったん成立した超越論的なもの（＝経験一般の可能性の条件）の支配下に置かれることによって，経験があくまでもその条件のもとでのみ可能な経験として」，「経験が乏しいものとなってしまう」という問題も絡んでくる [9]．以上二点の不十分さに対するドゥルーズ自身の「ポジティブな議論は，a：経験的なものから超越論的なものを純化させることによって，超越論的なものによる経験的なものの真の条件付けを可能にすると共に，b：超越論的なものの必然的適用によって貧しさを有することになる可能的な経験とは異なるリアルな経験の次元を開く，という作業になる [10]」．さらにドゥルーズは，後に本稿で示すように，カントが「超越論的な審級をたんなる条件付け」，より正確には外的な条件付けに還元してしまうこと（225）を様々な論点にわたって批判していく．この外的条件付けの観点は―ドゥルーズの議論の要点のみを取り出せば―，すでに構成されたものとして与えられる諸項を前提とし，そこから出発してそれら諸項間の関係を問うという手続きを踏む．たとえば与えられた感覚の多様

に対して，いかにしてカテゴリーが適用されるのかを問う（cf. 224-225）．この場合関係づけられる諸項は互いに「異種的」［*KrV*, A137＝B176］であるのだから，これらがいかにして，そしてなぜ連関するのかという大きな問題が生じてくることになり，「人間の魂の深みに隠された或る技術」［*KrV*, A141＝B180］としての図式論が呼び出されることになる[11]．これに対するドゥルーズ自身のポジティブな議論は，c：関係づけられる諸項をすでに構成されたものとして前提することなく，むしろそれらの発生の場面をとらえることを可能にする理論（私たちはこうした理論を〈関係の一般的理論〉と名付けることにする）を構築することによって，互いに異質で本性を異にする諸項を，それらの差異を抹消することなしに連関させることである．

DRにおける個体化の理論は，まさにこの三つの作業（a, b, c）が遂行される場面に他ならない．というのも第一に，個体化は，「経験において構成された個体」のあらゆる要素と本性上ことなるとされるのみでなく，そのうえこれら要素に「権利上先行し」，個体が発生する「プロセスと同時的な」「可塑的な原理として」の「超越論的原理」としてはたらくとされ（56-57，強調はドゥルーズ），第二に，このような個体化の次元のただなかにおいてとらえられる個体は，一定の空間的・時間的規定を付与され一定のひろがりと質を持つものとしてすでに構成しつくされた個体ではもはやなく，自らの変形ないし変化の原理を内に宿した「胚」として特徴づけられることとなり（322），胚がたとえば陥入や褶曲によって「本性を変えつつ自らを分割する」（326）ことで諸器官へと分化していくように，「まったく別の本性の形成」（93），「先行する可能性の制限によってなされることのない」「真の創造」（273），新しいものの創造としてのリアルな経験[12]を生きる次元がひらかれるからである．ドゥルーズの超越論的原理が「可塑的」と形容されたのは，その原理の適用される個体すなわち経験そのものが，ひるがえって以上のような可塑性を備えているからなのであ

る．さらに，第三に，以上の二つの論点を支えているのは，以下で本稿が示していくように〈関係の一般的理論〉に他ならない．この関係の理論は，DR 第 4 章を中心に，「理念」についての議論として展開されている．それゆえまずはこの「理念」論を検討していこう．

問題としての理念，あるいは関係の一般的理論としての理念

「差異の理念的総合」と題される DR 第 4 章は，この総合と対応するとされる「問題の一般的理論」を提示する（213）．この場面でドゥルーズが行っている作業に対してあらかじめ見通しを与えておくなら，この作業は，カントの「超越論的弁証論」における「理念」の議論を，とりわけて「真の問題を構成する」理念の「完全に正当な使用」，つまり「統制的」使用の文脈において取り出し（cf. 218），そのうえで微分法を中心とした数学的諸理論の歴史的変遷を彼なりに辿ることを介して，「差異的＝微分的関係［rapport différentiel］」を中軸とする〈関係の一般的理論〉としてのドゥルーズ自身の弁証論を提示することである，とまとめることができよう．

まずドゥルーズによれば，対象の総体にかかわる悟性の歩みをひとつの全体にまとめ，それによって認識に「最大の体系的統一」をもたらす役割を担うカントにおける理念[13]は，次の三つの契機を有している．1/「地平，あるいは焦点として知覚においてすでにはたらいている」，「現象に統一を与える」「客観的構造」としての理念の対象における「無規定性」．2/この理念の対象は他方で，それ自身が統一を与えると目される経験の諸対象との類比［アナロギア］によって「規定可能」となる（規定可能性）．3/理念はまた「事物の可能性の総体」にかかわる概念の「汎通的規定」の「理想」として，「悟性概念の種別化を保証」する（汎通的規定作用［détermination complète］）[14]．ドゥルーズはこうしたカントの理念論に対して，それが「深い理論」（209）であるとして評価を与える一方で，カン

トの理論がここでも外的条件付けの観点にとどまっていると批判する．つまり，理念が規定可能となるのは，いまみたように経験の対象との関係（類比の関係）においてのみであり，そして汎通的な規定という理想となるのは，理念自身ではなく悟性概念との関係においてのみであるという二点が批判される（220–221）．いずれにせよ，理念にとって外的なものとの関係という条件のもとでのみ，理念の特徴づけがなされるという点が問題とされているのである[15]．ドゥルーズは次のように診断を下す．カントはかくて外的条件付けの観点にとどまり，「発生」の観点に至ることがなかった（221）．

加えてドゥルーズは，カントにおける「理念がこの場面でコギトの三つの側面をとりあげなおしていることは明らかである」（220）として，デカルトのコギト論に対するカントの批判の要点を再提示する．ドゥルーズの整理にしたがってポイントのみを示せば以下のようになる．デカルトは未規定な実在としての「私は在る」を，規定作用としての「私は思考する」によって直接に規定しようとしたが，しかしカントによればこれは不可能であり，それが可能となるためには，この未規定な実在を規定可能とするための純粋な（直観）形式としての「時間」を導入する必要がある（116）．そしてドゥルーズがカントの「超越論哲学の最大の発意［initiative］」（117）をみてとるのはまさにこの点においてである．つまり，思考（意識）としての「私」の内部に，規定作用を行使する超越論的審級としての「私は思考する」という統覚の統一（自発性）と，それを受容するたんなる経験的現象としての「受動的な自我」との「内的差異」，「超越論的差異」を見出し，さらにこの差異を可能にするものとして，純粋形式としての「時間」を導入したという点をドゥルーズは評価するのである（116–117）[16]．しかしこの点においてもカントは自らの発意を推し進めることがなかったと診断される（117）．

以上の二点をふまえたドゥルーズ自身の課題は，理念そのものに形式と

しての時間と受動的自我を内部化すること，より一般的にいえば，未規定なもの，規定可能なもの，そして規定作用の「内的で問題的で客観的な統一」（220）を，理念そのものにおいて実現すること，そしてそれによって，関係づけられる諸項（未規定なもの）をあらかじめそれ自身の同一性を備えたすでに構成されたものとして前提したうえでそれらを関係づける（規定可能にする）のではなく，むしろ関係そのものから出発して，関係づけられる諸項を発生させる〈関係の一般的理論〉を構築し，理念に内的な発生を語ることである．この関係の一般的理論のモデルを提供するものが微分法を中心とする数学諸理論に他ならない．

それではドゥルーズ固有の理念とはどのようなものだろうか．彼自身による理念の構造にかんする要約的記述を参照することで，議論の大まかな見通しを得ておこう．「理念全体は差異化＝微分化／分化［différen*t*/*c*iation］という数学–生物学的システムにおいて捉えられる．とはいえ数学と生物学はここで差異の二つの半身，つまり弁証論的半身と感性的半身，潜在的なものの究明と現実化のプロセスを探査するための技術的モデルとしてのみ介入する．弁証論的理念は，差異的＝微分的関係の変化［variété］[17] と，それに相関する特異性の配分において二重に規定される（差異化＝微分化［différen*t*iation］）．感性的現実化は種別化と［器官部分の］合成において二重に規定される（分化［différen*c*iation］）」（285）．まずは数学がそのモデルとなる第一の半身，潜在的なものとしての理念の弁証論の中核をなす，差異化＝微分化／分化の議論を整理しよう．

理念における差異化＝微分化／分化

ドゥルーズはうえにみたカント的理念の三契機，つまり「無規定性」，「規定可能性」，「完足規定［détermination complète］[18]」にそれぞれ対応するかたちで，微分法にそのモデルをとった〈dx, dy〉〈$\frac{dy}{dx}$〉〈$\frac{dy}{dx}$ の値〉という三項を提示するが，これらの三契機こそが différen$\frac{t}{c}$iation の「t」の半身，

つまり差異化＝微分化の内実を構成し，いいかえれば潜在的なものである理念の「内容の規定」となる（267）．外的条件付けにとって代わる発生の観点を取り入れる関係の一般的理論としての「真の理由律」（66）[19] は，この三契機に対応する「規定可能性の原理」，「相互規定の原理」，「完足規定の原理」によって構成される（222）．以下ではその要点のみをまとめよう．

1/まず dx と dy はそれぞれ，変数 x と y との関係では 0 であり，この点で無規定である [20]．この事態が示すのは，つねに個別的な値をとり，「直観によって固定される量」としての「特殊量［quantum］」と，変数が受け取りうる個々の可能な値としての一般的な量を示す「悟性概念」としての「一般量［quantitas］」とが，dx と dy においては消失するということである [21]．そしてドゥルーズは，dx と dy を，すでに形成された量としてではなく，むしろ「量の認識の発生のための無条件な規則」として解釈することによって（227）[22]，これらを「量生成性［quantitabilité］[23] の純粋要素」として提示する（この要素は，経験的直観に与えられないがゆえに「純粋」と形容される（222））．

2/これらの無規定な，0 に等しい dx と dy はしかし，相互の関係において「規定可能」であり，それゆえに無規定なものには「規定可能性の原理が対応する」（223）．したがって正確にいえば，dx と dy がそれ自身の身分を持ちうるのは，それら相互の関係規定のみによってであって，この関係規定は，「差異的＝微分的関係」としての「$\frac{dy}{dx}$」によって表現される（ibid.）．だからこそ，この「相互的総合においてこそ，理念はその実効性のある総合的機能を措定し，展開する」といわれるのである（223-224）．そしてこの差異的＝微分的関係には「質生成性［qualitabilité］という純粋要素」が対応する．その理由は以下である．

たとえば，二次の曲線方程式を微分したさいに，得られる $\frac{dy}{dx}$ は直線を示すことになり，この意味で「質」を変える（曲線から直線へ）．しかし

ドゥルーズによれば，$\frac{dy}{dx}$ に個別的な値が結び付けられているかぎり，さらなる微分が可能である（この操作は「質の剥奪［disqualification］」と呼ばれる（226））．かくて$\frac{dy}{dx}$は，それに対応すべきあらゆる個別的な質（経験的直観に与えられる質）が剥奪されつつも，それにもかかわらず任意の質に普遍的に対応するという意味で，「質生成性という純粋要素」を表現するのである（224）．この場面でもう一点押さえておくべきなのは，$\frac{dy}{dx}$という関係が固定的なもの（たとえば $\frac{2}{4}$や$\frac{4}{8}$に対する $\frac{1}{2}$ がそうであるように）ではなく，その関係自体が変化するという点である（ibid.）[24]．いいかえればこの関係自身もまた，特定の個別的な値をそれ自身の同一性としてあらかじめ備えているのではなく，他の諸関係との関係によってのみ，それ自身の規定を得るということを押さえる必要がある．関係づけられる諸項を前提とすることなく，関係そのものから出発して諸項を発生させる〈関係の一般的理論〉は，それ自身関係であるもの（$\frac{dy}{dx}$）をも，関係から出発して規定するのである．このようにして，「理念は相互に規定可能な発生要素間の諸々の理念的な結びつき，すなわち諸々の差異的＝微分的関係としてあらわれる」（225）．

3/さらに―以下の点が理念の第三の契機に応じる論点であるが―，この$\frac{dy}{dx}$は実際の演算においては様々な値をとりうるだろう．たとえば或る曲線について $\frac{dy}{dx}$ が 0 となるとき，接線の傾きが 0 ということを示すわけだから，当の点において曲線は「鞍部」の形状を示し，これは「特異点」の一種に他ならない（cf. 229-230）．ここで問題となっているのは，差異的＝微分的関係から出発して，いかにして対象（曲線）の一部を発生させるか，いいかえれば潜在的なもの（理念に属する発生的諸要素およびそれらの関係）からの現実化であるが，ドゥルーズはこの論点をさらに一般化する．ここで彼が援用する数学的技法は，$\frac{dy}{dx}$ の連続的微分（微分の「反復」（227））によって，高次導関数の多項式の形式をとるベキ級数を得るという操作である[25]．この点に「純粋ポテンシャル生成性［ベキ生成性

potentialité］」が対応する（226）．ここで最低限押さえておくべきなのは，この要素が級数（セリー）形式を構成するという点である．まさにこの点にこそ，差異的＝微分的関係から出発してなされる対象の一部の局所的規定を可能とする，理念の第三の契機としての「完足規定の原理」が存するのである（227, 228）．その内実を整理すれば以下のようになろう．

ひとつひとつの級数（セリー）はそれぞれ「ただひとつの特異点」をとりまいているが（228），これら複数の級数（セリー）間のセリー形式によって，或る級数によって表現される対象（曲線）の一部と，他の級数によって表現される対象の別の一部との連関を検討することが可能となる．この連関には次の二つのケースが存する．第一に，諸々の級数が収束する場合と，第二に，それらが発散する場合である．前者においては，構成される対象（曲線）が連続的ないし正則的であり，後者においては非連続，すなわち対象は当該の点（特異点）において急激な変化を示す．かくて正則点と特異点の配分が規定され，セリー形式への展開によって漸進的に対象のふるまいが明確化されていくことになる（228）．しかしここで注意すべきなのは，微分方程式の解の次元にかかわる解曲線の形態による特異点の種別化（鞍部・ノード・中心等の諸形態による種別化）と，特異点がそもそも実在するか否かということ，そして特異と正則の配分そのものとの間には「本性上の差異」があり，潜在的なものである理念の完足規定がかかわるのは後者のみであるということである（230）[26]．この点は経験的なもの（解の次元で得られる個々の種別）からの超越論的なもの（潜在的な理念）の純化という観点からして見逃してはならない点であろう．

ところで，ドゥルーズがカントを引き合いに出しつつ，問題としての理念についての議論を開始したさい，未規定性・規定可能性・完足（汎通的）規定という三つの契機とともに「時間」が導入されていたが，この時間はどのようにドゥルーズ自身の体系に組み込まれることになるのか．それは，理念としての「問題」が，そもそも解をもちうるかどうか，すなわ

ち「解生成性［résolubilité］」(233) を規定していく場面においてである．

微分法が「問題としての問題の唯一の数学的表現」ではない[27]というドゥルーズがこの場面で援用するのは，代数学とりわけ群論の歴史的展開である．彼は特に「体［corps］」の添加という手続きを引き合いに出す (233)．この手続きは，たとえば〈或る方程式（五次以上の方程式）が代数的には（根によっては）解きえない〉ということを，実際に演算を行うことで経験的に明らかにするのではなく，問題（ここでは方程式）という超越論的な審級そのものの形式の内部で，漸進的ないし継起的に体を添加していくことによって明確化していくというものである[28]（ここにおいても経験的なものからの超越論的審級の純化が遂行されている (cf. 204–205)）．要するに,「解生成性」は問題（理念）そのものにおいて，問題が解きうるかどうかを「漸進的に識別すること」(234) にかかわる．そしてこの規定は「漸進的規定」(271) と名付けられ，まさにこの規定の漸進性（継起性）によって，理念のうちに「時間」が導入されるのである (234)．

まとめよう．理念はまず差異的＝微分的要素，それらの差異的＝微分的関係，この関係に対応する特異性という三つの次元を持つ．そしてそのそれぞれが,「規定可能性ないし量生成性の原理，相互規定ないし質生成性の原理，完足規定ないしポテンシャル生成性の原理」を構成する (356)．さらにこれら三つは，漸進的規定の「理念的な時間的次元に投影される」(ibid.)．まさにこの点において，理念の三つの契機は「漸進的規定のうちにそれらの体系的統一を見出す」(271)[29] といわれるのである．

かくて数学諸理論をモデルとして「弁証論的，問題的理念」の一般的構造が剔出され，différen*t*iation の内実が規定される．とはいえこうして取り出された理念の構造は，数学にかぎらずあらゆる学のシステム分析に用いられうる一般性を備えているとされる (234–235)．〈関係の一般的理論〉が取り出されたのである．しかしこの議論は différen*t*/*c*iation の「*t*」の半

身に過ぎない．とはいえ「c」の半身とのかかわりはすでに素描されている．というのも，微分方程式が解かれ，実際の解が導かれるのと同様に，「［差異的＝微分的］諸要素が様々な項と形態のうちに現実的に具現されるのと同時に，差異的＝微分的関係は多様な空間的時間的諸関係のうちに現実化されなければならない」からである（237：強調はドゥルーズ）．潜在的なものからの現実的なものの発生，潜在的なものの現実化，両半身の接続はまさにこの点に存する．こうして「発生と構造が調停」され（237），カントにおける規定可能性と汎通的規定にかんする外的条件付けにとって代わって，理念に内的な発生の条件が示されたのだが，しかしこの場面での発生は「静的発生」，「歴史を超える境位において必然的に進展する，ダイナミスムなき発生」と呼ばれる（238：強調はドゥルーズ）．このように呼ばれる理由を私たちは次のように解釈する．理念の一般的構造は，まさにその一般性のゆえに，具体的な個々の学を超えるものであり，この意味でまさにイデア的なものとして「生きられていない歴史」[30] とも呼びうる境位に属すためであると．理念そのものは「分化されることなしに差異化＝微分化されている［*différentiée sans être différenciée*］」（276：強調ドゥルーズ）し，さらに「自らを差異化＝微分化する［se différen*t*ier］最大の力能と，自らを分化させる［se differen*c*ier］無力能」を併せ持っているとまでいわれる（242）．それゆえ内的発生の場面が生きられるためには，潜在的なものの分化を始動させる審級，「現実的なものの分化［そのもの］を分化させる」審級（285），すなわち「第三のもの[31]」が必要となる．「時–空ダイナミスム」がそれである（276）．この場面で求められているのは，いわば静的な理念の構造に動的なファクターを装填すること，しかも理念の構造のあり方（関係の一般的理論）を自らのうちに取り込んでいる動的ファクターを装填することである．「t」と「c」の半身の入れ子構造を記述するこの場面において理論的モデルを提供するのは，今度は「胎生学［発生学 embryoligie］」（生物学）となる（155, 276）．そしてこ

の場面において「個体化」の議論が導入される．そこで私たちの以下での課題は，理念と個体化の関係，個体化と現実化＝分化との関係，そして時 - 空ダイナミスムの位置づけを評定することである．これらの連関が見えやすくなるよう，ドゥルーズの議論を再構成するかたちで議論を進めていこう．

理念・個体化・現実化＝分化

まずは胎生学（生殖卵）の提供するモデルにしたがって，全体的な見通しを得ておこう．「卵のうちに含みこまれている強度の差異が，まずは差異的＝微分的諸関係を，現実化されるべき潜在的素材として表現する．この個体化の強度的領野は，それが表現する諸関係を諸々の時–空ダイナミスムのうちに具現化すべく（ドラマ化），またこれら諸関係に対応する種のうちに具現すべく（種別的分化），そしてこれらの諸関係の諸特異点に対応する有機的諸部分のうちに具現すべく（有機的分化）規定する」(323)．まず着目したいのは，卵をモデルとする個体化の領野が強度（量）によって組織されており，この強度（量）の組織化に理念の差異的＝微分的関係がすでにかかわっているという点である．そしてこの強度（量）こそが，個体化から分化＝現実化への進展の出発点となっているため，私たちはまずこの強度（量）の身分と，強度と理念の構造との関係から検討していく．そのさい，この場面においてもなおカントとの対比をふまえる必要がある．あらかじめ要点のみを示しておけば，ドゥルーズはカント由来の「強度＝内包量」を「超越論的原理」の身分へと高めることによって(298)，個体化の強度的領野，そしてそこに基づく時–空ダイナミスム概念を練り上げていくのである．

直観（空間・時間）と「量」にかんする議論において，カントを向こうに回してドゥルーズが提示する議論の要点は，外延量を経験的直観に，強度量を超越論的原理へと割り振ることに存する．このドゥルーズの立場か

らすれば,「カントの誤り」は，超越論的な審級としての純粋直観（空間）に,「幾何学的外延［extention］」という性格をとどめおき（「直観の公理」），そして強度量に対しては,「これこれの度合いでひろがり［étendu：空間］を満たす素材」，つまり経験的直観（知覚）の個別的内容という身分を与えたことに存する（「知覚の予料」）（以上 298）．ドゥルーズにしたがえば，外延的なものであるのはあくまで経験的直観である．それに対して純粋直観としての空間は,「強度量がそこで組織されるスパティウム［強度空間］」と呼ばれる（355–356）．ドゥルーズの議論の大きな流れは，この強度量（超越論的原理）に属するスパティウムから出発して，経験的なものである外延量（ひろがり）の発生を描く，という方向をとる（cf. 296）．まさにこの発生という観点にこそ,「理念との親近性」，すなわち「ひろがりにおいて（理念に含まれる差異的＝微分的関係としての）理念的な結びつきの現実化を規定する,（強度的なスパティウムとしての）［空間の］能力」が見いだされるのである（299）．

ところでドゥルーズによれば，カント自身がこうした直観の動的な側面をすでに部分的にではあれ予示していた.「不一致対称物のパラドクス」がそれである[32]．たとえば右手とその鏡像（右手に対称的なのは鏡像においては左手となる）との差異は，概念の次元には還元されえない．別の側面からいえば，空間はその内部の任意の二点にいかなる差異もないようなのっぺらぼうのひろがりなのではなく，或る空間に内的な観察者を要求し，その観察者の位置によってはじめて右・左や上・下という空間に内的な差異が生じるという仕方で,「当の空間に結びつけられた観察者の観点から定義されなければならない」ということであり，このような空間をドゥルーズは「動的な空間」と呼ぶのである（39）．彼によればカントは，空間に内的な差異を精確にみてとってはいたが，しかしカントは概念的ではないこの差異を「外延量としてのひろがり全体との外的な関係」（298：強調ドゥルーズ),「空間全体への外的関係」（40）へとかかわらせざるを

えなかった．これに対しドゥルーズは，たとえば右と左，高低がその都度観察者の位置によって漸進的に変化していく「動的な空間」の「内的発生」を追求し，この発生の要素をまさに「強度量」にみてとるのである（40, 298）．

さらにここにもうひとつの論点が加わる．カントのように対象の実在［Dasein］を可能的なものと事象的なもの（レアールなもの）との対で考えてしまうとき，「実在は概念と同一であるが，しかし概念の外にある」ものとして，すなわち空間と時間においてあることによってはじめて事象的な実在として規定される（273：強調ドゥルーズ）．そしてこの空間と時間は互いに対して「無関係な媒体」にとどまる（ibid.）．これに対してドゥルーズが狙うのは，潜在的なものから出発して，つまり「理念に内的な時間と空間に応じて」，現実的な経験が産出されること，しかも産出される当の現実的な実在（経験）に固有の「特徴的な時間と空間において」産出されることである（ibid., cf. 277）．

うえでみたように，理念に内的な空間というのは，強度量がそこで組織されるスパティウムであった．では理念に内的な時間とは何か．それは漸進的規定に対応する理念的な時間に他ならないと考えられる．そしてこれら理念に内的な空間と時間をもとにして，個々の実在（経験）に固有で，当の実在によってのみ生きられる時間と空間をそれぞれ現実化するものが「時–空ダイナミスム」なのである．ところで，この時–空ダイナミスムは，潜在的なものの分化＝現実化を始動させる「第三のもの」と呼ばれていたわけだが，「これはすでにカントが図式と呼んでいたものではないのか」（281）．「図式はたしかに時間の規定と空間の構成の規則であるが，しかし図式は論理的可能性としての概念との関係で思考され，活用されている」．そして図式は悟性の概念に外的であるので，図式がなぜ感性に属する空間・時間的関係と悟性概念の論理的関係とを対応させることができるのか，これがみえない（ibid.）．それに対して理念に内的な時–空ダイナミス

ムは，現実的な時間と空間，現実的なものによってのみ生きられる時間と空間を，当の現実的なものとともに，理念（潜在的なもの）から発生させる「力能［puissance］」を有するものとして規定される（282）.「というのも，［ダイナミスムは］理念に内在的な差異的＝微分的関係，特異性そして漸進性を無媒介に具現するから」，いいかえれば内的発生を可能にする理念の構造を具現するからである（ibid.）．このダイナミスムはかくて，図式［schème］にとって代わる「理念のドラマ［drame］」と呼ばれる（281）．そしてこの現実化されるものに固有の時間と空間の創造のプロセスを取り出したものが「ドラマ化」なのである（279）[33]．しかしこの「ドラマ化の力能はどこに由来するのか」（285）．まさにこの場面において，「ドラマ化を基礎づけるもの」としての「もっとも強度的，あるいはもっとも個体的なはたらき」としての「強度（量）」が問題になるのであり（285），またこの強度（量）に固有のプロセスこそが「個体化」に他ならない（317）．以下では理念の構造との対応に論点を絞って，この議論の概要のみを示そう．

強度と個体化，あるいはダイナミスムを伴う強度的発生

個体化は理念＝多様体の差異化＝微分化の半身と，分化＝現実化の半身の「入れ子を保証する」（358）ものといわれるが，それはいかにしてか．理解の鍵になるのは，理念の場面で語られていた dx, dy の身分ならびに $\frac{dy}{dx}$ という関係と，強度の本性との類縁性である．さきにみたように，dx と dy は差異の象徴であった．いいかえれば，「可感的な形態」や「いかなる先行する同一性」，さらに「現実的実在」をも持たない「ポテンシャル」と不可分である（237）．すなわち，これらの要素は $\frac{dy}{dx}$ という相互規定の関係に入るときにはじめてそれ自身の身分を獲得する．これらのポテンシャルと相互的関係という性格こそが，「強度量と微分の類縁性」を形

作る（314–315）．というのも，$\frac{dy}{dx}$ は先にみたように，「それ自身が他の諸差異［dx, dy，また他の差異的＝微分的関係］へと帰されるところの差異によって構成されている」といえるものだが，この性質は同時に，「強度（量）の固有性」に他ならないからである（155）．「強度の感性論はその諸契機の各々を，理念の弁証論との対応において展開する．つまり強度の力能（深さ）は，理念のポテンシャル生成性のうちに基礎づけられる」（315）と語られるのはまさにこのためである[34]．そしてポテンシャル生成性のポイントは，セリー形式への組織化にあった．強度量はこの性格をも具現するものである．以下では私たちの解釈をも交えながら，理念の構造と強度との対応を整理していこう．

1/あらゆる強度（量）は E–E′ という形式をとり，この関係の要素のひとつである E がまた e–e′ へと帰され，またこの e が ε–ε′ へと帰されるという仕方で，「無限に反響する」（287）（別のテクストでは，こうした強度（量）は「ポテンシャルエネルギー」あるいは「ポテンシャルの差異」に折り重ねて理解されている[35]．またこの無限に二重化され，無限に反響する差異の状態が「齟齬［disparité］」ないし「齟齬する作用［disparation］」[36] と呼ばれる（287, 317））．2/そしてこうしたセリー（e.g. E–E′）を他のセリー（e–e′）へとかかわらせ，「内的共鳴」を引き起こすものが「暗き先触れ」である（154, 157．なお暗き先触れは「齟齬をもたらすもの［dispars］」と呼ばれる（157））．この「暗き先触れ」は，理念の構造で語られていた，級数の正則あるいは発散という形で正則点と特異点の配分を行い，それによって諸々のセリーを連結させるという論点に連関すると考えられる．3/次にここから「強制運動」が帰結する（154–155）．この論点は，暗き先触れによるセリー間連結のうち，とりわけ或る特異点と別の特異点を連結させる発散に対応するものと考えられ，基となるセリー（E–E′）の正則的な連続性を断ち切り，急激な変化を対象（曲線）にもたらすものと解釈できる．4/以上の内的反響と強制運動を表現する「時–空ダイナミスム」の

形成がそれに続く（155, 356）．このダイナミスムは基となるセリーの振れ幅，いいかえればその変化の振れ幅をはみ出すという強制運動の性質を分け持っているために，「すでに構成された主体全体の死を引き起こしかねない」ものであり（155），可塑性を備えた胚のみが生きうる運動をもたらす（155–156）．5/加えてこうした胚は，時–空ダイナミスムを受容する「個体的主体」，「幼生の主体」（278），あるいは「受動的自我」（155）ともいいかえられる．この意味での主体のみが個体化の強度的領野の一部を構成する（156, 355）．以上の1–5の論点が，個体化の強度的領野に位置付けられる「個体化ファクター」を構成する[37]．そしてこの領野に素材としての強度を提供するのがスパティウムであり，また漸進的規定の理念的時間となる．以上の諸論点に支えられることで，強度（量）によって形成される時–空ダイナミスムが，理念の構造を内に宿し，そのうえで強度という力能を備えることで現実化＝分化を作動させる，という議論が可能となる（276）．さらに，「分化［＝現実化］はつねに同時に諸々の種と諸部分の，諸々の質とひろがりの分化であり，質の付与［qualification］ないし種別化と同時に，部分合成［partition］ないし有機的組織化である」（271）といわれるのは，この二重の分化がそれぞれ理念の質生成性と量生成性に対応するからである．

かくて現実化されるものに固有の時間や空間（たとえば生体内の内部環境と当の生体が位置する外部環境（279–280）），ならびに質やひろがりが，潜在的なものの現実化＝分化として創造される（cf. 277, 316）．この現実化が「創造」といわれるのは，現実化の母体となる潜在的次元に属する差異的＝微分的関係・特異性と，現実化によって発生した質・ひろがりが，互いに類似しておらず，また同時に，発生した質とひろがりが，当の発生によってはじめておのれの現実性を獲得するからである（cf. 273）．時間と空間はもはや感性のアプリオリな形式ではなく，現実化される個体とともにその都度創造され，当の個体のみによって生きられるものとなる．こ

のようにダイナミスムが強度量に立脚しているがゆえに，「強度こそがドラマ化する」といわれ，強度量が「現実化の条件」といわれるのである（316）．こうなると結局のところ，以上の議論の全体が強度（量）に立脚しているといえるだろう（cf. 355）．

さらに強度（量）のもうひとつの重要な，そして決定的な特質は，「本性を変えることによってのみ分割される」（cf. 306, 327, 355）というものである．ここまでみてきたように，強度は或る現実的なもの（個体）に特有の時間・空間・質・ひろがりへと現実化される．しかしながら，強度はその本性そのものにおいては質的でも外延的でもない（cf. 307）．強度においてはその二重のあり方が区別されなければならない．つまり第一に，「強度を展開する［ことで構成される］諸々の質とひろがりのうちに，強度が包み込まれている状態」，そして第二に，「強度が包み込むものであると同時に包み込まれるものとして，それ自身のうちに含まれている状態」（309, cf. 326），いいかえれば，強度が質やひろがりとは独立に，強度自身のうちに自らを含みこんでいる状態である（cf. 305）．この議論のポイントは次の点にある．つまり，強度はそれが質とひろがりへと展開されていっても，そこに包み込まれた仕方でとどまり続けると同時に，他方でこうして質とひろがりへと展開された強度は，まさにそのことによって自らの本性を変えてしまう，いいかえれば，強度がいわば二重化されるということである[38]．デランダによる直感的に理解しやすい例を引き合いに出せば，一定量の水を加熱すると，（或る時点において）容器の上部が高温に，下部が低温になり，この意味で水は分割されうるといえるけれども，しかしそのさいもともとの水の系の均衡が壊されているし，過熱を続ければ流動状態のアトラクターを示すことになるだろう．かくて強度（量）の分割はもともとの系（システム）の本性を変えてしまうということである[39]．しかしながら，強度は質とひろがりへと展開されるときにもなお自らのうちに含みこまれたまま存続している．強度の「非対称」性はこの点に認め

られるだろう（cf. 306, 315）．強度のこうした特質こそがまさに，「個体化が種別化と本性上ことなり，それ［種別化］を可能にし，それに先行する」（197）という事態を基礎付ける．「個体化が権利上分化に先行し，すべての分化が，先立つ個体化の強度的領野を前提する」というこの点が見逃されてしまうと，超越論的な審級と経験的なものの外的な相互条件付けという悪循環に再び陥ってしまうことになり，「差異の哲学の総体が危険にさらされてしまう」（318）．かくて経験的なもの（現実化されたもの）からの超越論的原理（現実化する強度）の純化というドゥルーズの目論見は，彼自身の「差異の哲学」の根幹にかかわる課題に他ならなかったのであり，そしてこの純化が実現されるのは，以上のような強度の本性に立脚することによってなのである．さらに，質とひろがりへと展開されても自己自身のうちにとどまり続ける強度のあり方によって，一挙に現実化がなされることでそこで決定的に経験（個体）が構成しつくされることなしに，むしろ変化の契機を内に宿し続ける経験（個体）の可塑性が担保される．こうして陥入や褶曲によって本性を変えることで自らを分割し，諸器官へと分化していく胚のように，まったく別の本性の形成，新しいものの創造としてのリアルな経験を生きる場面がひらかれることになる．そしてここまでみてきたように，こうした議論を支えているのは，関係を取り結ぶ諸項の内的発生を基礎付ける〈関係の一般的理論〉であり，その構造を具現する強度の特性に他ならない．以上の意味において，DRにおけるドゥルーズの超越論哲学（「差異の哲学」）は，外的条件付けの観点にとどまる「可能的経験」の条件ではなく，「内的発生を形成する」「リアルな経験の条件」を探求する哲学として規定される（200）．かくて個体化の理論は，DRにおけるドゥルーズの超越論哲学の核心をなす理論に他ならないのである．

注

[1] Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968. 訳出にあたっては，財津訳（『差異と反復』河出書房新社，1992 年.），Patton 訳（*Difference and Repetition*, Colombia University Press, 1994.）を参考にしたが，訳文はすべて引用者のものである．なお引用文中の［ ］内は引用者の挿入である．DR にかんしては引用箇所の頁数のみを本文中に示す．なおカント『純粋理性批判』（*KrV* と略記）にかんしては，Ph 版のテクスト（1998 年版）にしたがい，参照指示は慣例にしたがって表記する．

[2] のちにみるように「スパティウム」（あるいは「深さ」）とそこに位置づけられる「強度」という概念が重要な役割を果たすが，ドゥルーズ自身が述べることになるように，彼の関心は深さから「表面」（Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969（『意味の論理学』））へとシフトするし，DR における強度についての理論は「素描」にすぎなかったとされる（Deleuze, « Note pour l'édition italienne de *Logique du sens* », *Deux régimes de fous et autres textes*, Minuit, 2003, p. 59（以下 DRF と略記））．とはいえ他方で，「多様体」「特異性」「強度」「出来事」「問題」といった DR に登場する一連の基礎概念は，ドゥルーズ自身が認めているように，DR 以降のドゥルーズの著作全体にわたって用いられ続けるし（ibid.），ドゥルーズは DR が「「哲学すること」を試みた最初の本」であり，「その後に私がやったことのすべてはこの本とつながっている」と明言する（Deleuze, « Préface à l'édition américaine de *Différence et répétition* », DRF, p. 280）．DR 以降のドゥルーズ哲学の展開や転回―そのようなものがあるとして―を考えるためにも，まずはドゥルーズ哲学の最初の体系的提示としての DR の内容を押さえるべき所以である．

[3] この記述の分散は，先に述べたように DR で提示される複数の概念や論点がまさに個体化の理論において交錯するという点に由来する．このため本稿での DR への参照指示が複数のことなる箇所にわたっていることをあらかじめ断っておきたい．

[4] Cf. Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Minuit, p. 40.『カントの批判哲学』が「敵についての本」であったというドゥルーズ自身のことばを参照（Deleuze, *Pourparlers 1972–1990*, Minuit, 1990/2003, p. 14）．Smith［2006］によれば，DR は「ドゥルーズの『純粋理性批判』として読むことができる」（p. 45）．彼はまた「『アンチオイディプス』をドゥルーズの『実践理性批判』（欲望の理論）として読むことができる」とも語るが（p. 45, 53, 55），しかしドゥルーズ自身によれば『アンチオイディプス』は「カント的野心」を有し

ており，それは「無意識の次元での一種の『純粋理性批判』」の試みであったと語っている（DRF289）．DRに限らず，ドゥルーズの各著作において，彼がカントから引き継ぐ論点，引き継ぎつつもその根本的な点を改変する論点，また真っ向から批判する論点はそれぞれ多岐にわたっている．本稿では立ち入らないDRでの論点，たとえば「超越論的統覚」についてはLord［2012］を参照．

[5] Deleuze, *La philosophie critique de Kant*, PUF, 1971, p. 22（以下PCKと略記）．

[6] Cf. *KrV*, A154–158＝B193–197. Cf. 鈴木［2005］p. 263，注（3）．

[7] Lebrun［1996］pp. 220–221.

[8] この三段の綜合にかんしては，たとえばBeydoun［2015］を参照．

[9] 鈴木［2005］pp. 243–244.

[10] 鈴木［2005］p. 244.

[11] 図式論は感性と悟性という「異種的」な能力を連関させるものであるが，ドゥルーズはDRにおいて彼自身の諸能力の交流の議論をも提示している．この能力論についてはすでに多くの研究が存する．たとえば田中［1984］，江川［2003］（とりわけ第5章VI節pp. 216–226），Bryant［2008］．本稿ではこの論点には立ち入らない．「諸能力についての理論が今日陥っている不評は―この理論はしかし哲学のシステムにおいてまったくもって必要な部門なのだが―，この本来的な意味で超越論的な経験論についての誤解によって説明され，ひとはむなしくもこの経験論に，超越論的なものの経験的なものへの転写を置き換えてきたのである」（DR186）．とはいえ「私たちの主題は，ここではこのような諸能力についての理論を確立することではない」（187）という留保をも踏まえるべきであろう．

[12] 「可能的経験とのその一致のみをリアルなものにかんしてとどめおく感性的なものの理論」と，「リアルなもののリアリティーを，それが反省されるかぎりで救済する美の理論」へと「分裂した」エステティック（94）の再統合をもねらうドゥルーズにとって，芸術作品が「上演＝表象 représentation」の領野を離れ，いわば作品自身と作品を享受する者が一体となる「実演＝実験 expérience」としての「真の劇場」となり，こうした事態が「超越論的経験論」と名指されることになる（DR79：強調ドゥルーズ）．

[13] PCK, p. 33.

[14] DR220. 以上三点にかんしては，*KrV*, A571–574＝B599–602を参照．

[15] カントの理念論にかんする別の批判点としては，カントはこれら理念の三契機を，それぞれ別の超越論的理念（自我・世界・神）へと具現させたことが挙げられる（DR221）．ドゥルーズは以下でみるようにカント的理念を変形さ

せるわけだが，それにともないこれら三つの形象も「ひび割れた私／受動的自我」「カオスモス」「神の死」という「永遠回帰の世界」における三審級へと変形されることになる．この点については Lapoujade［2014］pp. 101–102 を参照.

[16]「合理的心理学から宇宙論への移行にかんする一般的注解」［*KrV*, B428–B432］を参照.

[17] ドゥルーズは，それ自身は定常的なものとして前提される関係の可変的規定（たとえば $\frac{1}{2}$ に対する $\frac{2}{4}$ や $\frac{4}{8}$）を「可変性［variabilité］」と呼び，関係それ自身の「変化の度」としての「変化［variété］」と区別している（DR224）.

[18] 先ほどはカントの文脈で「汎通的規定」と訳したが，ドゥルーズ自身において complète という形容詞は「完全」ないし「全体的」ではなく，むしろ部分的でありかつ完足的であるという意味で用いられる（ドゥルーズはこの点にかんしてデカルトの「第四答弁」を参照している（ATVII221:11ff）（270, cf. 67））．これはのちにみるように，完足規定のモデルを提供する $\frac{dy}{dx}$ の値が，対象（曲線）の一部の局所的な規定を表現するからである.

[19] Lapoujade がいうように,「ドゥルーズは充足理由律を手放さない」（Lapoujade［2014］p. 33）．それは超越論哲学が事実問題ではなく権利問題を，すなわち〈なぜ，いかにして〉という問いを提起する哲学としても特徴づけられるからである（PCK21–22, cf. DR295）.

[20] Duffy［2006］pp. 49–53, Duffy［2013］pp. 8–11 を参照.

[21] なお quantum と quantitas については，*KrV*, A142/B182 を参照.「特殊量」,「一般量」という訳語は田中［1984］p. 199 に学んだ.

[22] Cf. Duffy［2013］p. 24.

[23] この訳語とのちに示す「質生成性［qualitabilité］」の訳語も田中［1984］から学んだ.

[24] 先に挙げた variété がこの関係自身の変化に対応する.

[25] この点にかんする立ち入った説明については，Duffy［2006］pp. 70–73, Duffy［2013］pp. 20–23 を参照.

[26] 個々の解が個別的，個体的なものだとすれば，特異性そのものはこの意味で「前-個体的」なものである（228）.

[27] 近藤［2008］はこの一文を,「微分法は技術的にみて，問題であるかぎりの問題の唯一の数学的表現である」と引用しており（近藤［2008］p. 97），この点は修正されねばならないが，しかし DR における「微分法」が「あくまで〈理念〉の三つのアスペクトの一つの例証である」とする彼の結論には私たちも

同意する（近藤［2008］p. 99，強調は近藤）.

[28] Cf. Smith［2003］pp. 426–428. また体の添加にかんしてはLautman［2006］pp. 166–168をも参照.

[29] この点については，Smith［2003］p. 430をも参照.

[30] Lautman［2006］p. 244（強調は引用者）.「静的発生」については，Deleuze, « À quoi reconnaît-on le structuralisme ? », *L'île déserte*（以下IDと略記），pp. 251–252をも参照.

[31] Deleuze, « La méthode de dramatisation », ID, p. 143.

[32] DR23, 39, 40, 40n.1, 298，またカント『プロレゴメナ』13節，福谷［2009］pp. 184–205参照.

[33] ドラマ化は空間と時間双方に同時にかかわり（cf. 279–282），DR第二章で提示される「時間の総合」の議論がそのまま「空間の総合」へと引き写される（296–299）．本稿ではこの点に立ち入る余裕はない．なお「ドラマ」については，1/まずこのことばが示す舞台芸術との連関―先に注でしめした「実演＝実験」，超越論的経験論としての「真の劇場」との連関（本稿注12参照）―，そして2/ガンディヤックも指摘しているように，「ドラマ」はギリシア語由来の語源的な意味において「はたらき［action］」を意味し（ID150），能動性，力動性を示唆するものであること，さらに3/ヘーゲルが彼の『哲学史講義』において，誤ってアリストテレスのものとして伝えられてしまっていると語る「ドラマにおける三一致」の法則，すなわち「行為［筋Handlung］，時間そして場所」の一致―これは「古代のエステティック」の理論に他ならない―の法則を念頭に置くべきかもしれない（Hegel, *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*, *Werke in zwanzig Bänden*, Frankfurt, Suhrkamp, 1971, B. 19, S. 134）．DRにおいて「ドラマ」は，時間・空間規定に加え，「行為」にかかわるものだからである（cf. DR124）.

[34] Lapoujadeが正当に指摘しているとおり，個体化の理論はかくて「理念」にかんする「弁証論」（DR第4章）と「強度」をめぐる「感性論」（DR第5章）を，「分析論」を経ずにダイレクトに結び付ける役割を有している（Lapoujade［2014］pp. 109–110）．しかしたしかにドゥルーズは，「分析論」にまったく言及しないわけではない．時間の諸総合にかんして彼は，「第一の受動的総合がひとつの「感性論」を構成しているとすれば，第二の［受動的総合］をひとつの「分析論」の等価物として規定することは正当なことである」と語る（144）．それというのも，第二の受動的総合すなわち「エロス–ムネモシュネ」の総合は，「快原理」ないし原則が，「［当の原則の］支配するものに対していかにして適用されるのか」，要するに経験に対する原則の適用を主眼とするか

らである（143-144）．とはいえ，ドゥルーズが「分析論」について多くを語らないということはたしかである．というのも，「分析論」は，カントにおいて「判断力の超越論的理説」に他ならないわけだが，ドゥルーズは「判断」一般について批判的な態度を終始つらぬくからである．なお田中［1984］はすでに，DR の第 4 章と第 5 章が「それぞれカントの理念論と感性論の批判的突破であることは明らか」という正当な指摘を行っている（p. 191）．

[35] Deleuze, « Gilbert Simondon, *L'individu et sa genèse physico-biologique* », ID, p. 121.

[36] これら「齟齬」にかんする事情については，邦訳『差異と反復』第一章訳注（55）参照．

[37] Cf. ID143, DR355-356.

[38]「巻き込みの中心［les centres d'enveloppement］」という概念がこの論点に対応する．これは現実化がなされた場面ではじめて登場する基礎概念であり，その機能は以下である．ここまで示してきた個体化とシステム論の諸ファクターは，現実化がなされると自らの強度的性格を取り消す傾向にある（差異の取り消し），あるいは現実化によって創造された質やひろがりによって覆い隠されてしまう傾向にあるが，それでもなお現実化された次元でのこれらの諸ファクターの存続・固執を示すものが「巻き込みの中心」である（cf. DR329, 356）．

[39] Delanda［2002］p. 25.

文献表

〈著作〉

江川隆男『存在と差異　ドゥルーズの超越論的経験論』知泉書館，2003 年．

小泉義之，鈴木泉，檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』平凡社，2008 年．

福谷茂『カント哲学試論』知泉書館，2009 年．

山内志朗『「誤読」の哲学　ドゥルーズ，フーコーから中世哲学へ』青土社，2013 年．

Alliez, Eric（dir.), *Gilles Deleuze: une vie philosophique*, Le Plessis-Robinson, 1998.

Badiou, Alain, *Deleuze*, Hachette, 1997.

Bogue, Ronald, *Deleuze and Guattari*, Routledge, 1989.

Bouaniche, Arnauld, *Gilles Deleuze, une introduction*, Pocket, 2007.

Bryant, Levi R., *Difference and Givenness: Deleuze's Transcendental Empiricism and the Ontology of Immanence*, Northwestern University Press, 2008.

Delanda, Manuel, *Intensive Science and Virtual Philosophy*, Continuum, 2002.

Duffy, Simon B., *The Logic of Expression, Quality, Quantity and Intensity in Spinoza, Hegel and Deleuze*, Ashgate, 2006.
Duffy, Simon B., *Deleuze and the History of Mathematics*, Bloomsbury, 2013.
Lapoujade, David, *Deleuze, les mouvements aberrants,* Minuit, 2014.
Lautman, Albert, *Les mathématiques, les idées et le réel physique*, Vrin, 2006.
Montebello, Pierre, *Deleuze: La passion de la pensée*, Vrin, 2008.
Sauvagnargues, Anne, *Deleuze: L'empirisme transcendental*, PUF, 2009.
Smith, Daniel W. and Henry Somers-Hall (ed.), *The Cambridge Companion to Deleuze*, Cambridge University Press, 2012.
Zourabichvili, François, Anne Sauvagnargues et Paola Marrati, *La philosophie de Deleuze*, PUF, 2004.
〈論文〉
近藤和敬「『差異と反復』における微分法の位置と役割」小泉義之，鈴木泉，檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』平凡社，2008年，pp. 80–102.
鈴木泉「ドゥルーズ哲学の生成1945–1969」『現代思想』第30巻第10号，青土社，2002年，pp. 125–147.
鈴木泉「現代フランス哲学における超越論的経験(論)―ドゥルーズの場合―」『現代の哲学：西洋哲学史2600年の視野より』哲学史研究会編，昭和堂，2005年，pp. 238–266.
鈴木泉「書評　江川隆男著（知泉書館・2003年10月発行）『存在と差異　ドゥルーズの超越的経験論』」『スピノザーナ』第6号，スピノザ協会年報，2005年，pp. 79–86.
田中敏彦「ドゥルーズとカント―能力論を中心にして」『現代思想　総特集ドゥルーズ＝ガタリ』1984年，pp. 184–230.
檜垣立哉「ドゥルーズ哲学における〈転回〉について―個体化論の転変」，小泉義之，鈴木泉，檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』平凡社，2008年，pp. 360–379.
Bague, Bruce, Transcendental Empiricism: Deleuze's Response to Hegel, *Man and World* 25, 1992, pp. 133–148.
Beydoun, Zaki, Les deux activités synthétiques de l'imagination : Leur rôle dans la théorie kantienne de la sensibilité, *Revue philosophique de la France et de l'étranger,* 2015, n. 1, pp. 17–35.
Delanda, Manuel, Deleuze, mathematics, and realist ontology, in *The Cambridge Companion to Deleuze*, edited by Daniel W. Smith and Henry Somers-Hall, Cambridge University Press, 2012, pp. 220–238.

Durie, Robin, Immanence and Difference: Toward a Relational Ontology, *The Southern Journal of Philosophy* 60, 2002, pp. 161–189.

James, Williams, Difference and Repetition, in *The Cambridge Companion to Deleuze*, edited by Daniel W. Smith and Henry Somers-Hall, Cambridge University Press, 2012, pp. 33–54.

Kerslake, Christian, Deleuze, Kant, and the Question of Metacritique, *The Southern Journal of Philosophy* 42, 2004, pp. 481–508.

Lebrun, Gérald, Le transcendental et son image, in *Gilles Deleuze: une vie philosophique*, edited by Eric Alliez, Le Plessis-Robinson, 1998, pp. 207–232.

Lord, Beth, Deleuze and Kant, in *The Cambridge Companion to Deleuze*, edited by Daniel W. Smith and Henry Somers-Hall, Cambridge University Press, 2012, pp. 82–102.

Smith, Daniel W. Deleuze's Theory of Sensation: Overcoming the Kantian Duality, in *Deleuze: A Critical Reader*, edited by Paul Patton, Blackwell, 1996, pp. 29–56.

Smith, Daniel W., Mathematics and the Theory of Multiplicities: Badiou and Deleuze Revisited, *The Southern Journal of Philosophy* 41, 2003, pp. 411–449.

Smith, Daniel W., Deleuze, Kant, and the Theory of Immanent Ideas, in *Deleuze and Philosophy*, edited by Constantin V. Boundas, Edinburgh University Press, 2006, pp. 43–61.